

永井夫婦の契りは、居住の遠近を問わず、心は一つになって夫婦相和しの模範である。

(社引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)

## 臨月の妻が

### 愛児の遺骨を胸に引揚げ

新潟県 近 庄 次

大志をいだいて

「青年よ征け大陸へ」のポスターを見た私は、昭和十三年度の徴兵検査に十九歳で志願した。幸い甲種合格になったので検査官に、満州部隊に行きたい旨を申告した。同年十二月末、綏芬河<sup>すいふんが</sup>東部第二国境守備隊と決まり、翌十四年二月二十八日に広島へ集合するようにと通知がきた。広島を出て約一週間後に目的地綏芬河に着いた。このようなわけで第一の目的を達した。中隊には三年兵がいた。したがって三年間の辛抱であ

る。たまたま同年六月ころ、北部国境線でノモンハン事件が勃発して数カ月後、日本軍大敗で戦闘は停戦となった。そこで日本から松岡全權大使がモスクワに派遣されて、ここに日ソ不可侵条約が締結されたのである。

昭和十六年秋ころ、私も三年兵は来年の春には満期除隊だとお互いに喜びあい、一日千秋の思いでいたのであったが、十二月八日、大東亜戦争が始まった。

これではとても除隊の見込みがなくなつたと、みんな諦めてしまった。

翌十七年二月早々、「現地除隊を希望する者は申告せよ」という命令が出たので、我々三年兵は飛び上がつて喜んだ。私はこれで第二の目的を達することができた。

横道河子鉄道警護訓練所勤務

数日後私の中隊から十一人、その他各中隊からの現地除隊者が就職を求めて集合した。就職先は、満鉄をはじめ警察関係電気通信その他多様であつた。私は鉄道警護隊に就職した。そして同年十二月、奉天中央鉄

道警護学院を卒業し、牡丹江鉄道警護隊本部へ申告に行つたところ、本部付の横道河子鉄道警護訓練所勤務の辞令を受けたので赴任した。

訓練所長は満系の高官であつた。その下に鳥取の土井さん、大分の森山さん、三重の山下さん、福島山口さん、宮城の中島さん、静岡の油井さん、東京の足立さん、それに私と日本人は八人、その他満鮮系職員が三人、ボーイ炊事要員五人がいた。訓練生は全満から採用された親日派の満鮮系である。常時八十人などの生徒がおり、法学、実科教養を受けていた。日系職員では私が一番若輩だったが、家族的な楽しい職場であつた。

諦めていた妻子がきた

昭和十九年四月、結婚のために日本に帰つた。

大東亜戦争は対岸的な気持ちでいたが、新潟航路の船上には海軍の高射機関銃隊が乗り組んでおり、船内では救命胴衣の着用などの訓練が行われ、本土に近づくにしたがつて緊張した。国内ではすべてが配給制であり、それでも結婚式には、役場から清酒三本の特配

があつた。花嫁はモンペ姿である。一億火の玉欲しがりません勝つまでは、という本土の戦時態勢を見た私は、一日も早く帰つた方が無難と考えて二人で横道河子に帰つた。同年九月末ころ、妻の実家から手紙が届いた。妻の父が病床に、弟が来春朝鮮部隊に入隊するとの内容であつた。そこで妻も、来年四月ころ出産の予定であるので帰国することにした。

十月五日、私がハルビン駅まで送つて別れた。翌二十年四月大きな男子を出産して、母子共に健康である旨の手紙が妻から届いた。父も健康になつて、満雄と命名したとのことであつた。その後、日一日と戦局悪化し南方の島々は米軍の手に落ち、口にこそしないが日本は負けると思つていたし、生徒たちも同様であつたようだ。こんなわけで、土井さんを初め早く奥さんと呼ばないと満州へ帰れなくなるというので私も心配になり、手紙や電報を打つたが全々音信がなかつた。その後、沖繩も陥落し、いよいよ本土決戦となるだろうが農村なので妻子は内地にいた方が安全であろう、と思ひ全く諦めていた。

七月二十七日昼ごろボーイが、奥さんが赤ん坊をおぶって駅で待っているから早く行ってくれ、というので半信半疑の気持で駅へ行つたところ、間違ひなく男児を背にした妻がいたので驚いた。初対面の我が子を見てびっくりするやら、嬉しいやらの気持ちだった。

妻の話では羅津の旅館から何回も迎えに来るようになると電報を打ち、毎日列車が着く度に駅に行つたが、手持ちの金もなくなつて満雄のオシメだけ持つて荷物は旅館に預けてきたという。もちろん電報は一本も届いていなかった。

この日から親子三人の楽しい生活が始まつたのである。これで私が大陸に渡つた目的が達した。

#### 条約を破つてソ連軍が侵攻

八月九日訓練所へ出勤したら、大変な事件が起きていた。牡丹江本部からの緊急電話で、昨夜宣戦の布告もなく突如ソ連軍が各国境を突破侵入し、目下日本軍と交戦中というので全く仰天したのである。一方的に日ソ不可侵条約を破るとは、実に言語道断である。思えば昭和十六年秋ころ同盟国のドイツ軍がモスクワ近

くまで侵攻したとき、ソ連軍の国境守備隊がどんどんモスクワに移送され、目に見えて手薄になつていった。このとき、私たち下士官が中隊長室に行き、ソ連を討つなら今ですぞと詰め寄つたところ、中隊長は「お前たちも知つてのとおり、日ソ不可侵条約があるのだから日本の武士道に反することができるか」と叱られたことを今でも覚えてゐる。ソ連軍上層部では武士道を重んずる日本人だから、不可侵条約を必ず守る、という判断に基づいて国境守備の兵力をモスクワに送つたものと思つた。私が現役当時、全山が要塞化し難攻不落の陣地と称していたのに、なぜこんなになやすく敵が侵入できたのか不可解であつた。

横道河子の駅に行つて見たら、牡丹江方面からハルビン方面に向かう避難列車が続々と入つてくる。機関車から客車、貨車の屋根まで鈴なりの人であつた。驚いたことに貨車の車軸に乗つて落ちないように体を縄で縛りつけている者、連結器の上にも二、三人が乗つていた。私はつくづく敗戦を実感したのである。

水盃で妻子との別れ

妻子を迎えて十七日間で、幸せの我が家の夢は崩壊した。昭和二十年八月十二日、正午ころ本部からの命令がきた。今夜十二時横道河子始発で避難列車を出すから、必ず家族をこの列車に乗せること。職員、生徒は別命あるまで待機のこと。なお、町の現地人には秘匿のことという内容であった。

土井さんが日系職員を集め、いよいよ来るべき時がきた。果たして家族はどこまで避難できるか全く予想もつかない。「職員の中で家族が一番多いのは中島君だから家族と同行してくれ、我々の家族はすべて君に託す。どこか安住の地があれば生きながらえてくれ。もし最後の時がきたら一発でやってくれ。すべては君の判断にまかせ」という命令を与えたのである。中島さんを始め、みな悲壮な決意をした。緊張していたためかだれも金銭のことを口にしなかった。家族が避難するとなれば当然所持金が必要なわけで、私は急いで郵便局に行ったが、閉鎖されていた。九日の日に行っておれば払い下げできたと思うが、敗戦の体験がない私たちはうっかりしていたのである。

午後二時ごろ、二機のソ連戦闘機が町の上空を旋回していた。偵察のためか被害はなかった。この晩、満雄を早々に寝かせて妻と所持品を準備した。結局背中にリュック、前に子供、両手にトランクという出で立ちだった（主として子供の荷物であった）。中島さんが一緒だから心配はないと言っただけで、土井さんが言ったことは聞かせなかった。どこまで逃げられるか、果たして再会できるかどうか全く先のことは分からない。「最後まで満雄を頼む。生きのびられるところまで頑張ってもらいたい」と言いながら妻と水盃で別れを惜しんだのである。昼にソ連機の飛来があったため、町は灯火管制となり、暗闇の中を駅まで送った。

眠たいところを起こされて泣く子供、母とはぐれて母を呼ぶ子、母は狂乱のごとく我が子を求め呼び叫んでいる。阿鼻叫喚とはこういうことを言うのであろう。駅には機関車の後に客車二両、無蓋貨車が十数両と連結して、我々の家族を待っていた。幸い客車には満鉄の家族と警護隊、それに訓練所の家族が乗った。車内で中島さんの手を握り妻子のことを頼んだ。列車は十

二時ちようど、行き先も分からないまま発車した。私ども職員は自宅に帰らず、全員官舎の講堂で起居することになった。

我々にも後退命令がきた

八月三日午後、牡丹江方面に応援に行く日本軍の貨物列車が止まっていた。そこへソ連軍の戦闘機二機が飛んできたかと思つたとたんに、貨車を目標に機関砲射撃であつた。相当な死傷者が出たようだった。十四日十時ごろ本部から後退命令がきた。本部員並びに管下隊員と共に午後四時ごろ、横道河子に着く予定であるから万事遺漏のなきようにと内容であつたので、食糧を始め武器弾薬などすべてホームに運び、生徒と共に列車の着くのを待った。

本部長以下乗車した三十両ほどの有蓋貨物列車が到着した。横道河子隊員をはじめ訓練所の者も生徒と共に乗車したが、残念ながら国境の綏芬河隊、虎頭隊などは敵と交戦中ということで、この列車には乗っていなかった。

私たちは走る列車の中で、家族ほどの辺まで逃げた

だろるか中島さんも大変だななどと家族の安否について話していた。

避難列車の中で終戦を知る

列車は順調に走っていたが、八月十五日昼過ぎある駅に止まったので不審に思っていると、本部から伝令がきた。戦争は終わったから現地人で下車したい者は降りてもよろしい。今から自由な身である。食糧は希望するだけ与えるというようなことであつた。土井さんが、「本当に終わったのか」と伝令に尋ねると、「無条件降伏だそうです」というので我々は愕然とした。負けるとは思っていたがこんなに早くと半信半疑だった。生徒や満鮮系の職員、所長もここで下車してしまつた。残つたのは五、六百人の日本人だけだった。ハルビン駅を目の前にして止まった駅舎の屋上に、赤旗が数本掲げていたのに驚いた。実に早いもんだと、この赤旗を見て私たちは間違いなく戦争が終わつたことを実感した。

結局列車はハルビンに入ることができず、吉林を通過して新京へ出る線を走つたのである。

## 吉林駅で武装解除

八月十八日朝七時ごろ吉林駅に停車した。いまま少しで新京に行けるのにと話していたら伝令が来た。ソ連軍の武装解除があるから全員下車せよ。各隊の兵器係は残って、ソ連軍に武器弾薬など一切を引き渡すようにというので、私たちはこんな早くソ連軍が吉林まで来ているのかと信用できなかつたが、下車してみた。なんと駅舎の近くにソ連軍の重戦車四、五台があつた。しかも、乗員の中に女の兵隊がいたのは肝をつぶさなばかりに驚いた。戦闘の第一線に出るのが戦車隊である。その戦車に女の兵士がいるとは当時としてはとても日本人の感覚では考えられないことであつた。

訓練所の兵器係は私である。ほかの隊員十五人で全員から集めた軍刀、ピストルを始めすべての武器弾薬をソ連軍の将校に引き渡すのだが、彼らは計算に弱く引き渡しを完了したのは昼近くであつた。本隊が鉄道線路を通つて松花江の橋を渡つて行くところを見ていたので、引き渡しを終えた我々も、本隊に合流するため鉄橋まで行くと両端に警備兵がいた。彼らが持つて

いる銃を見たら、日本軍が所持する明治時代の単発式小銃とは全々違い、数十発も撃てる自動小銃だつた。これではとても日本軍は問題にならないことがよく分かつた。

收容所を脱走して難民となる

鉄橋から五、六百メートルの所に、旧日本軍の兵舎があつて本隊がいた。もちろん周囲は鉄条網を巡らし要所には監視兵がいた。この日の夕刻、日本軍の部隊長が、「諸君は軍人でないから收容所にいる必要はない。今晚なら監視もまだ手薄だから食糧を持つて脱走した方がよい」と言つた。訓練所の者と横道河子隊員の一部で、夜中に脱走することにした。午前二時ごろと思う。監視兵の目を盗んで脱走した。

松花江を渡れば吉林市内である。幸い水量が少なかつたので、浅瀬を探し無事吉林の町に入った。一行三十二人公園で朝を待った。朝になって日本人街に行き、難民の收容先を尋ねたところ近くの女学校に入つていることが分かり急いでそこに行く。かぎの字型の校舎で二階の片側には数百人の難民婦女がいた。私ども

は反対側の二階を使用した。これで私も難民となった。だれも所持金がないため、各人が日本人街を回って収容所にいる者ですと話すと、奥さんたちは同情して、毛布など衣類を恵んでくれたので、必要以外の物を満人に売って金にした。兵隊と間違えられては大変なので、国防色などの衣服は一切捨て、平民になって身分を秘匿した。一番困ったのは毎夜、ソ連兵が婦女子がいる方に侵入して来る。「助けて」と悲鳴をあげており、かわいそうであるが、彼らは自動小銃を持っているので、残念ながら助けることはとてもできなかった。こんなことで私も家族の安否を心配したのである。吉林の町は治安が悪く駅通りには満人の若者が集まり、木刀やツルハシの柄などを持って、日本人が通ると金品を強奪するということが、町へ出ることはできなかった。

九月末ごろともなると朝夕寒くなってきた。

風の便りで家族は新京に

十月に入ったころだと思う。横道河子の隊員が、我々の家族は新京にいるらしい。という噂を聞き込んでき

た。半信半疑だが一応新京へ行ってみる必要があるというので、新京へ向かう列車の情報入手のため、手を尽くすことにした。駅へ行くほとんど軍用列車ばかりだ。十月中旬になって、明日の昼、満鉄の家族を乗せた列車が出るということ聞き込んだ我々一行は、遠回りをしてホームに行くと、すでに列車は満員で、屋根の上に乗ってる者もいる。私と山下さんは機関車の煙突近くに乗った。機関士は日本人だが、助手は満人である。発車して間もなく助手が自分の帽子を手に、この中に銭を入れるというので三十銭を入れた。新京の駅は人でごったがえしていた。下車はしたが果たして新京のどこにいるのか全く分からない。我々が駅前に出たところ、天の助けが土井さんが前任地で勤務したころの部下に会った。この人が訓練所と横道河子の家族は南新京駅裏の満鉄社宅にいと教えてくれたので、勇んで南新京駅に向かった。途中街の所要所に中国語とソ連語で書いたソ連軍駐屯地司令官の布告が、大きく張つてあるのを見て肝を冷やした。

一、外出時間は午前六時から午後六時までとする。

これに違反した者は厳罰に処す。とあり更に次の者を密告した者には賞金を与える。一、日本軍憲兵だった者。一、特務機関員だった者。一、警察官だった者。

一、軍人だった者。一、武器弾薬の隠匿場所。

という布告であった。土井さんは我々も警察官に該当するので、たとえ日本人でも食うに困れば日本人を売る者がでるかもしれない。決して身分を明かさないうに家族にもよく言っておく必要があると注意した。

妻子と五十日ぶりに再会

南新京に向かう途中にある学校、幼稚園、倉庫などに大勢の避難民が入っていた。土葬したらしく歩道の敷石を取って埋葬した跡が多々あった。公園や広場には闇市場ができてにぎわっていた。夕刻近く南新京駅に着いた。駅裏は一望千里の草原で、鉄道から二、三百メートルの所に七、八十棟の新しい社宅があった。近づいて見ると一棟が二軒になっていた。表にいた人に尋ねると、横道河子の人なら一番前の列にいるらしいと言ったので、前列の住宅を探して行くと道路から入って三棟目に訓練所の家族がおり、更に二列目に横

道河子隊員の家族がいた。妻子たちは私たちの姿を見てびっくり仰天した。果たしてどんな所でどのような生活をしていたのか。そればかりが心配だったが、幸運にも住宅は最高に恵まれていたのである。一棟が二軒になっており八、六、六の三間で水洗便所があつて、中島さんがうまく部屋割りをしてくれていた。満州に來て十七日で別れた満雄も、六カ月となり一人でお座りができるようになっていた。五十日ぶりで愛児を膝の上にする事ができた。だれも再会できようとは夢にも考えていなかったと思う。この家には中島さん、山下さん、足立さんと私でそのほかの者は隣にいる。満雄がひどい咳をするのが気にかかった。奥さんたちは、百日咳ではないかと言っていた。妻の話では列車はハルビンを出てから、順調に走らず一カ所に二、三日も止まったりして、そのたびに足立さんの奥さんが中島さんと一緒に鉄道司令部へ行つて、交渉しては列車を出したという。奥さんは両親と子供のころからウラジオストックに長く住んでいたことのある人で、日本語よりロシア語が達者であつた。この奥さんのお陰

で事故もなくみんな助かった。ホームに止まると満人が窓から鉤の付いた棒を突っ込んで、網棚の荷物を捕るため、暑くても窓を開けることができず、オシメを洗う水も中島さんからくんできてもらって洗っていた。横道河子を出て十四日ぶりようやく南新京で下車することができた。そのため満雄はすっかり体調をくずしてしまったという話であったので、私は中島さんに妻子がお世話になったお礼を申し上げた。生活の方は子供をおぶって日本人街に行き布団、毛布、衣類などを恵んでいただき、必要以外の物を満人に売って、その舍で食料などを買って生活してきたという。我々が若林でやったことと同じことをして生活していたわけであった。さすがに満鉄社宅だけあって、石炭はたくさんあって毎日入浴ができた。

#### 日本人の墓地を造る

新京では日本人会本部ができていたとのことであるが、最後まで一粒の米さえ援助を受けたことはなかった。毎日のように難民が集まって来るので人口は数倍にもなったことと思う。学校、幼稚園などに収容され

ていた婦女子は、栄養失調や発疹チフスなどで、毎日多数の死亡者があったようだ。遺体は収容所付近や空地に土葬されていた。そこで日本人会では、この冬に三万人くらいの死亡者が出ることを予想して、市の周辺に土が凍結しない前に、日本人基地を造るということになって、私たち団地の草原にも二千人分の墓地を造ることになった。町内会長の指示で、私たちも四日間の勤勞奉仕に出て墓盤の目のように墓穴を掘った。数日後に、自分の掘った墓穴にかわいい我が子の骨を埋めようとは夢にも思わなかったのである。

#### 愛児を亡くする

満雄の咳はだんだんひどくなり熱もある。なんとか助けたいが金もないし医者もない。同居の人たちから入院のための金を借りて、私は市内の病院を尋ね歩いたがどこも休業や閉鎖となっていた。ようやく一軒の病院が見つかり院長にお願いしたら、満員だが子供ならなんとかしようと言うので、すぐ家に戻り満雄を連れて再度病院に行き、診察していただいたところ、「肺炎を起こしており手遅れです」と言われたので、

私たちは頭から冷水を浴びたような衝撃をうけた。入院はできたものの既に手遅れとは、本当がつくりした。生後六カ月で両親と別れていく、我が子は入院して三日目、十月二十七日午後十一時四十分ごろ、ついに死出の旅に立った。妻は冷たくなってゆく愛児を抱えて泣くばかり、若い私たちには実に悲劇であった。翌朝冷たい死骸を背にして帰宅した。もちろん同居の人たちはびびりした。一応葬儀のまねぐらいとは思いい坊さんを探したところ、町内会長が元坊さんだったので、お経を上げていただき戒名も頂戴した。

愛児を我が手で火葬に

私たちは、かわいそうでもとも異国の地に土葬することはできないので、自分で火葬にすることにした。私はこれまでに横道河子で数人の火葬をやった体験があるので、中島さんたちのお手伝いを願って駅から古い枕木数本をもらったり、空家から適当な材木を墓地に運び、一番下に鉄板を敷いて準備をした。二十三歳の妻にはとても見せることができないので、焼け終わったら呼ぶことにして家に残した。数時間後、妻を呼

び、止めどもなく流れる涙と共に骨を拾った。ソ連軍の侵攻さえなければと思うと悔しくてならなかった。生前二本の歯しかなかったのに十三本の歯を拾った。遺骨は手製の小箱に納め鉄板に残った物は、先日私が掘った墓穴に埋め上から土を覆い、満雄の生年月日と死亡年月日そして私の本籍地を書いた角材の墓標を立てた。

引揚げまでに死亡したのは山口さんの長女三歳、山下さんの三女二カ月の三人であった。

生さんがために稼ぐ

果たして引揚げはいつかだれにも分からない。南新京駅近くの公園では毎日闇市でにぎわっているので私と中島さんと、今川焼を焼いて売ることになった。なけなしの金を出しあつて道具を求め、空家から材木を運んで屋台店を造り、中島さんの妹さんと妻が焼くことにした。二人で何度焼いても素人の悲しさで、キツネ色のこんがりした色にならない。白っぽい今川焼は全々売れず、結局二日で失敗に終わった。同居の人たちは労働者として満人の家で働く者、物資のプロウカ

ーをやる者など様々であった。稼がなければ食料も買うことができないため必死であった。私は飯店でコークスを使つてからコークス拾いをやることにした。リュックとスコップ、それに手製の熊手を持つて高い煙突のある場所に行く。そこは病院の跡地で石炭の燃えがらが山になっていた。熊手で角の方から掘つていくと燃えかすのコークスが結構あつた。半年でリュックいっぱいになつたので、駅前の飯店に行くと言ひで買つてくれた。一斤幾らだつたか忘れたがよい稼ぎになつた。これで食料を買つて帰宅する。だれもやつてる者がいないから市内の高い煙突を目標として掘つて歩けば、数カ月は稼ぐことができると言ひでいた。その後四、五日経つたところ中島さんと山下さんに仲間に入れてくれないかと頼まれたので、お互いに助けあつていかなければならないので、私は快く承知した。翌日からは三人で掘つて歩いたのである。私が一人なら数カ月は稼げたのだが一カ月くらいで掘り尽くしてしまつた。

#### 新京駅ホームの掃除人夫に

十二月中旬ころ、町ではソ連軍が布告にあるような日本人狩りをやっているとか、街の広場では満人が日本人を人民裁判と称して、絞首刑にしているとか様々なうわさが流れていたし、現に昨日早朝、私たち隣家の元満州国の高官という人が、秘密警察に踏み込まれて連行された事件が起こつた。我々もこれには驚いた。こんなことから土井さんが我々もいつやられるか分かんらん。ソ連軍は鉄道、電気、通信職員を保護しているようだ。幸い新京駅の保線区長をよく知っているのので、身分保証のために無給でもよいから当分人夫として使つてもらおうと思つているがどうかという相談があつた。私どもは身分の秘匿が最も大切だったので、無給でも生活はなんとかなるだろうと、その意見に賛成した。翌日保線区に行きロシア語と中国語に書いた鉄道従業員という腕章を各人がもらえ、更に駐屯地司令官名の鉄道従業員の住宅であるから侵すことを禁ずるといふ住宅の玄関前に張る注意書を二枚もらひうけた。もちろん無給である。私ども八人は数本の貨物ホームを竹箒で清掃するのが仕事である。日本軍の乗つたシ

ペリヤ行きの列車が駅に毎日たくさん入ってきた。兵隊たちは私どもを気の毒と思つてか、毛布や現金を恵んでくれる者もいた。そんなわけで掃除もせず専ら軍用列車が到着すると金品を恵んでもらつた。帰宅の途中に毛布を売つて食料を求めた。また、ホームにソ連軍の食糧集積所があつて自動小銃を持った警備兵がいたが、この兵士に小銭を渡すと小麦粉一袋が手に入り、毎日ホームに出ているならばなんとか食べていくことができた。

十二月末ごろになると日本軍のシペリヤ行きの列車は全く入らなくなつた。したがつて我々の収入も無くなつてしまつた。そこで考えたのが毎日早朝に新京駅から南新京を通過する機関車があつたので、我々はお勤前にこの機関車から石炭を失敬して売ることにした。地平線から未だ太陽が出ないうちに、リュックや南京袋を持つて歩いて新京駅の機関庫に急ぎ、発車する前に炭水車に乗る。発車するとリュックと南京袋に石炭を詰める。機関士は日本人のため私たちはお願いしなすど声をかけると軽くうなずくだけで、特別何も言わ

なかつたし、我々に恵んでくれるのだと感謝しながら毎日失敬を続けた。南新京駅近くになるとリュックなどを地面に放り投げ、ポイントの所で徐行する際に飛び降りるのである。いったん家に持ち帰つて朝食を済ませ、急いでまた出掛ける。石炭は夕刻帰宅後に売りに行つた。その後だんだん失敬する者が増加して機関士がたまりかねて、帰りの石炭は残しておいてくれと悲鳴をあげていたこともあつた。

#### ソ連軍の布告により身分を登録

昭和二十一年一月ごろ駐屯地司令官の新しい布告がでた。日本人男子で十八歳から四十歳までの者は指定の場所で身分を登録せよ、登録した者には身分証明書を与える、今後、身分証明書を所持しない者は厳罰に処す、という内容だつた。そこで私たちは、鉄道従業員の腕章を付けているが、いつ首を切られるか分からないから一応登録をしておいた方がよい、ということになり仕事を早めにやめて、八人で指定された場所へ行く。建物の中には大勢の日本人がいた。幾つかの机があつてソ連軍の将校とやはりソ連人の通訳が付いて

尋問をしていた。その様子を見てみると特に若い者に対して、軍歴、兵科、特技などを詳細に聞いているのが私は気になった。しかも終わって帰る者には身分証明どころか、紙切れ一枚も与えないのである。どうも変だと疑惑をもった。その後、将校が今日は遅くなつたので残つた者は明日九時に出勤せよ、とのことので我々はそのまま帰宅した。私は土井さんに、「どう見ても変です。軍歴、兵科などに力を入れて尋問しており、しかも身分証明らしい物は全く与えていません。若い者をシベリヤへ送る手段ではないかと思うのですが」と言うと土井さんも私同様に感じていたらしく、明日再び行くが兵歴や前職については一切口にしないように、ということであつた。そして翌朝全員で出勤した。私の名前を呼んだ。型通りに本籍、氏名、生年月日を尋ねた。そして軍歴は、兵科は何かと尋ねるので、「十八歳のときから肺病になつて入院生活を続けていたので軍隊にいたことはありません」と答えたが、若いのに兵隊に行かないことはなからうと詰問してくる。ここで負けたら大変だと思い、「それほど信用できない

ければレントゲンで調べてください」と頑張つた。私が入隊するとき、船中が急性肺炎をおこし約一週間を要して綴芥河に着き、そのまま担架で陸軍病院に運ばれて四十二日間入院し九死に一生を得た体であるため、素人考えでもレントゲンを撮れば影のようなものが残っているだろう、と思つて自信をもつて言いはつたのである。その後、間もなく「帰つてもよい」と言つたので助かつたと思ひながら表に出たが、身分証明書どころか紙片一枚もくれなかつたから、彼らが日本人を集めた目的は分かつたのである。私も訓練所の者は全員無事に帰宅することができた。

それから一週間ぐらいたつた早朝、町内会長が、私にソ連軍の将校が呼んでいるから私の家にきてくれと言つたので愕然とした。この前の登録で終わったものと喜んでいたので、二十六歳の私をどうしてもシベリヤへ送るつもりらしい、絶対に彼らには負けるもんか、レントゲンで頑張る他はない、と決意をして家を出た。妻はもちろんなこと同居のみんなもこのままシベリヤへ連行されるのではないかと心配した。

会長宅の前にはジープ二台が止まっていた。中に入ったら二十代の青年八人がおり不安そうな顔をしていた。いよいよ私の番がきて別室に入った。用意された机には先日と別な将校二人と通訳がいた。彼らはズバリ軍歴と兵科を詰問してきた。私は、「結核を長年患っていたので兵役は一切免除され全く軍隊には関係ありません。これほど申し上げても信用できなければ軍にもレントゲンがあるでしょうから一緒に行つて撮つて調べていただきたい」と頑張つたところ将校は二人で何か話していたが、帰つてもよい、と帰宅を許してくれ、内心ほつとしながら帰宅した。数日後町内会長に聞いてみたら二人がそのまま連行された。とのことで私は二回とも助かった。ソ連軍は身分証明書を餌に日本男子を集め、その中から若い健康な者を選んでシベリヤへ送るといふ実に巧妙悪質なやりかたであった。

ソ連軍引揚げ鉄道を首になる

昭和二十一年三月ころと思う。ソ連軍の本国への引揚げが始まった。日本軍をシベリヤに送つてからは彼らは専ら、満州にある物資資材を毎日のように貨物列

車で本国に輸送した。新京でも私どもが使役して食糧を初め鉄道用レール、電柱用のトランス、石炭、タイヤのないトラックまで積み込んだ。私たちはソ連軍が引き揚げたことよつて無用となり鉄道を解雇されてしまった。こんなわけで、機関車から石炭を失敬することもできなくなつてしまった。今後は各人が収入を得る道を考へていかなければならなくなつたのである。

花売りをやつて稼ぐ

ソ連軍が引き揚げてからは平穏な日が続いた。私も団地の裏手は草原地帯であるため五、六月ころになると、ユリ、芍薬、ナデシコ、アザミ、オミナエシ、その他名の知らない様々な花が咲いている。私は市内のどこにも花屋がないから、この花を売つたらきつと売れる、と考へて妻と二人で午後草原にいつてこれらの花を採り、家に帰つて適当な小束に組み合わせる百束ほど作り、翌朝早々一斗缶二つを天びんに担いで中心街の市場に行き妻に売らせたところ二時間ほどで全部売れてしまった、といふので内心驚いた。当時物価も上がつていたので一束三円か四円だつたと思う。翌

日からは二百束ずつにして商売を続けた。こんなわけで、花売りが一番よかったと記憶している。

当時妻が妊娠していたので栄養には特に気を遣っていた。

共産軍が新京を占領する

ある日の午後、二人で花を採っていたら地平線に黒いものが点々と現れた。なんだろうと思っっているうちに、その数は増加するばかりで右、左にと動いている。だんだん近くなって人であることが分かった。その数は数万人と思われる、新京を包囲の態勢で近づいて来るので私たちは恐くなり花を採るのをやめて帰宅することにした。そのとき、頭上に蒋介石軍のマークが付いた三機の輸送機がきたかと思うと箱のような物のついたパラシュート四、五十個が落下した。風向風速を過

つてか全部黒山のように押し寄せて来る人たちの所に全部落下した。その後間もなく、機関銃音がしたので黒い服装した者は共産軍ではないかと思ったのである。当時新京は旧満州国軍が蒋介石軍となつて治安維持に当たっていたのである。輸送機はこれら市内防衛軍に

武器弾薬を輸送してきたものと思われた。銃声はますます激しくなってきた。我々の団地が一番郊外にあるため戦場になるのではないかと心配があつたので、窓という窓に流弾が入らないように南京袋に詰めた石炭袋や米袋など置いて戦禍の通り過ぎるのを待ったが、ますます銃撃戦が激しくなり本当に雨アラレの銃撃戦であつた。山下さんと便所の窓のすき間から見たら、軒下の機関銃は蒋介石軍だつた。子供たちをベチカルの所に集めて被害のないようにした。結局夕刻に我々の所を通過してこんどは市街戦が始まつた。

市街戦は、三、四日続き共産軍が新京を占領した。共産軍は市内の隠匿物資や要人の摘発が毎日行われているというので私どもは一層と身分の秘匿に神経を遣つたのである。

共産軍の使役にくじびき

共産軍が入京してから六月ころと思う。南方つまり数十キロ四平街方向にドドンという重砲弾の音がして黒煙が見える。人の話では蒋介石の正規軍が共産軍を追つて北上しており南方では、すでに、日本人の引

揚げが始まっているそうである。郊外にある我々の団地は一難去つて再び戦場になることを覚悟した。そんなある日、町内会長から、共産軍が日本人の使役を命じてきたので、集まってもらいたい、という指示に私もは仰天した。戦争には現地人を使役するのは常道である。戦場に狩り出されて前線に弾薬を運んだり、壕を掘ったり、負傷者を担架で後方に運んだり使役である。死亡しても骨を拾ってくれる者もなく、虫けら同然である。すでに南の方から引揚げが始まったというのに実に大変なことになってしまった。一文の保証もなく死亡すれば、それつきりでシベリアへ行くより悪い。

私は満雄の遺骨に、お父さんを守ってください、とお祈りした。各人の奥さんたちは主人に当たつたら大変と顔色なく送りだした。班長の家ではクジが用意してあつた。必ず当たりが一本入っているので、くじを引くときの気持ちはだれもが悲壮であつた。中には手がふるえる人もいた。この晩の気持ちは今でもよく覚えていゝる。幸い訓練所の者は助かつたが、その後二回

あつたが我々には当たらなかつた。砲声は日、一日と新京に近づいてくる。結局班から三名が行つたが、五日して一名が帰宅した。人の話しでは担架を放り投げて逃げ帰つたとか、他の二人は最後まで帰宅しなかつた。

私たちは戦場を覚悟していたが、ある日突然共産軍が新京からいなくなつたのに驚いた。吉林方面に逃げたという話だつた。そして数日して、町内会長が、蒋介石の正規軍十万人が入城するので日本人も歓迎に出てもらいたいとの達しがあつて、駅前通りに歓迎に行つたのである。共産軍は更衣服だつたが正規軍は、新軍、新二軍と称してすべてがアメリカ装備で誠に整然たるものだつた。戦車を先頭に重砲火器部隊、歩兵と続き全員通過を終えるのは半日を要した。無血入城を果たし、そのため我々の住宅も助かつたのである。

待望の引揚げが始まる

正規軍が入城して十日ほどしてからで七月中旬と思う。町内会長から、日本人の引揚げが始まるから名簿を作つて提出するように、という指示があつたので、

みんな涙を流して喜びあった。難民生活の一年は長い長い一年だった。これも蒋介石軍のお陰であった。ただ私は妻が八月に出産の予定なので、とても無理だと考え、私たちは残つて出産してから帰る、と言つたら奥さんたちはみんなで面倒をみるから大丈夫心配はいらない、と言うし妻も一緒に帰りたい、と言うので不安はあつたが妻の言うとおり一緒に帰国する手續をした。

我々の地区では学校などに収容されていた人たちから帰国が始まつた。私は途中で何が起るかわからなから食料だけはたくさん持った方がよいと思つて、飯盒食器などをリュックに詰め、更にいまひとつのリュックには出産準備の衣料品や毛布などを詰めて列車に乗る日を待った。

二、三日して私どもが乗る日がきた。南新京駅には木材などを積む台車式の貨物列車が二十両ほど連結したのが待つていた。人が落ちないように角材で棚にした程度のものでリュックを中央に置き、その周りに婦女子がリュックに背を当てるようにして外側の方は男

性がリュックを強奪されないように座つた。列車は正午ころに発つた。心の中で新京との別れを告げる。みんなうきうきであるが臨月の妻を抱える私には一様の不安があつた。列車が駅に止まると満人が集まつてくる、油断はできない。二日目の夜、雨が降つた。こんなこともあるうと思つて蛇の目傘を用意していたので妻の体に雨が当たらないようにした。そして翌日終点のコロ島駅に着いた。私どもはすぐにも乗船できるものと思つていたが、先客の順番待ちということでも五日倉庫のような収容所で待つた。食料をたくさん持つてきたので飯盒で食事をするのできたのである。

#### 日章旗を見て感激の涙を

いよいよ待ちに待つた乗船の日がきた。歩いて港に行く。驚いたことに引揚げ船上に、日章旗（日の丸）がひるがえつていた。敗戦、無条件降伏の祖国に毅然として日章旗が残つていた。想像もしなかつた光景であつた。私はこの日章旗を見て生涯忘れることのできない感激を受けたのである。

この日章旗の許で百万人の人たちが死んだであろう

か。国破れて日章旗を残る。よくぞ連合軍が許可したものだ。船は米軍から備用した上陸用舟艇とかで学校の屋内運動場のような船室であつた。乗船して安堵したのか妻がおなかが痛いと言いだしたので、私は産婆さんはいませんかと船内を探し歩いたら運よく乗船していたので別室で診ていただいたら、まだ大丈夫です、と言われたのでほっとした。そのうちに妻の痛みも止まった。

夢に見た祖国の土を踏む

船は順調に波を切っている。思えば昭和十四年二月この玄界灘の荒波で船酔いをし、その上、風邪を引いて船中で四十度八分の高熱が続き、九死に一生を得た魔の玄界灘も祖国に帰れるという喜びで船酔いもなく乗り越えた。午後四時ころ佐世保港に安着した。

ついに祖国の土を踏んだ。本当に感激であつた。これで身分の秘匿もなく難民からも開放された。みんな涙を流していた。頭から白い粉を散布されて驚いたが、ノミ、シラミ駆除薬のDDTと聞かされた。収容施設に入つて入浴をして、ようやく落ち着いた。この夜は

久しぶりで足を伸ばして眠ることができた。朝になつて祖国に帰つたことをしみじみと実感した。二日ほどして臨時列車で故郷に帰る日がきた。生死を共にしてきた人たちの別れである。最初は大分県の森山さん、次に鳥取県の土井さんである。いつの日か再会を約してお別れした。大阪近くで再び妻がおなか痛いと言うので大阪で下車して診察して行く積りだったが、大阪駅に着いたらホームは人でごった返していた。列車が止まったと思つたら、どつと大勢の人が乗り込んできた。「開けろ」と叫びながらドンドン窓をたたくのに驚いた。窓を開けたら五、六人が入つてきた。私たちの足許で立つたまま身動きもできないほどだった。妻もびっくりしたためおなかの痛みが止まったので下車するのをやめた。大阪駅でお別れしたのは三重県の山下さん、福島県の山口さん、宮城県の中島さん、静岡の油井さんたちでも再会を約して別れたのである。足立さんは東京出身であるが東京は食糧難とと思うので奥さんの叔母が新潟市にいるため、奥さんの身内を頼つて行くことにしたので、私たちと最後まで

一緒であった。幸いこの列車は北陸回りの青森行きなので乗り換えは一度もなくて助かった。大阪で乗った人たちもいつの間にかいなくなっている。私たちは波静かな日本海を眺めながら、海の向こうには朝鮮があり、満州がある、などと語りながら走り、新津駅で足立さん夫婦とお別れした。本当に奥さんにはお世話になったのである。

臨月の妻が愛児の遺骨を胸に

新津駅を出れば一時間ほどで懐かしい故郷である。車窓から見る田園風景は平和そのものであった。国破れて山河あり”ふる里に近づくにしたがって忘れることのできない懐かしい山や川が心をうつ。昭和二十一年八月七日正午すぎ夢にまで見た故郷の駅に下車してホームの砂利を踏んだのである。妻は前年七月満雄を背にして親せき縁者に送られて同じホームから元気に発ったのである。それが変わり果てた満雄の遺骨を臨月の妻が胸に抱えて背にはみすばらしいリュックを背負っているのだ。私の生家は駅から十五分くらいであった。全て音信もなく突然こんな姿で帰ったら母や

兄たちはどんなにか驚くことであろうなどと話しながら歩く。沿道の樹木には昼の蝉しぐれでいっぱいだった。これがふる里である。

「私たちはただ今帰りました」と声をかけて玄関に入ると昼休み中の母や兄夫婦は私たちの姿を見て仰天した。あとの言葉は涙で続かなかった。

毎日三人で無事に帰って来るようにと神仏にお祈り続けていたという母は変わり果てた満雄の遺骨を抱えて泣くばかりだった。兄は早速同村の妻の生家に私たちが帰って来たことを知らせに走った。翌日妻の生家に行き両親たちと涙の対面をした。私は百日余りも養育してくれた満雄を亡くしたことをおわびした。北朝鮮部隊に入隊した弟はシベリヤに連行されたものと推定された。引揚げの途中、おながが痛むと言っていた妻も生家に帰って順調に過ごし、九月一日に次男を出産した。栄養不足を心配したが普通児であったのでほっとした。両親たちは、満雄の生まれかわりだ、と言って喜んでくれたのである。その後昭和二十七年に長女が誕生した。私は公務員となり定年まで勤め、子

供たちは東京で居を構え、孫も四人に恵まれて、七十五歳の私と七十二歳の妻と平和な日々好日を感じつつ年金生活を送っている。

なお、再会を約した私たちは数十年ぶりで夫婦同伴のうえ、鳥取県と三重県との二回集合して語れども語り尽くせぬ話で温泉旅館で夜を明かしたのである。

私はコロ島の引揚船にひるがえつてる日章旗を見た衝撃的感激を生涯忘れることができず、あれから数十年、祝祭日ともなれば我が家の玄関前には必ず日章旗をかかげてまいりました。今後私が生きている限り続くことでありましょう。

### 【執筆者の横顔】

近庄次氏は大正八年七月生まれ、新潟県の農家の三男、地元の青年学校在学中から広漠たる満蒙の天地で思う存分働いてお国のためになる人間として生きたいと夢を抱き続けていた。

昭和十五年、軍隊に志願し、幸いに合格し満州部隊に入り、その間ノモンハン事件に出兵、ソ連の軍隊、

兵器などを見聞し国防の重大性をしみじみと感じた。

同十七年除隊と同時に満州国の警護隊員に採用なつて牡丹江、横道河子と転属して勤務しながら各民族との親睦と融和を基本とした地方の警備に専念していた。妻は郷里の新潟に帰つてお産を済ませて、昭和十九年七月赤ん坊を背負つて七難八苦の中、満州に帰つてきた。夫婦の愛、夫婦のきずなの強烈をこのときほど感じたことはない。と戦陣訓のように近氏は今も涙を流して語る。

翌二十年八月終戦にあう。ソ連軍から警護隊員など全員、吉林収容所に入れられた。

近氏はソ連軍の収容所監視の目をのがれて脱走に成功し、どこをどうぐり抜けて走つたか、昼は山野にかくれ、夜陰に乗じて徒手空拳で歩き通し、全く鳥獣と等しい生き様、ようやく五十日ぶりで新京で妻子とめぐり会えた。近氏はもちろん奥さんも再会の喜び感激で泣いた。

しかし妻は栄養失調で乳も出ない。出ない乳房をくわえて愛児は死んだ。近氏は土を掘り起こして墓地を

造り葬った悲劇は今なお忘れられないとボロボロと涙を流して話すのである。

生きている夫婦は死んではならない。愛児の遺髪をふところにして、満州人や中国軍隊の人夫になつて賃かせぎ、妻は花売りなど苦勞苦痛、食べられるものは何でも食べて生きた。

ただ、もつとも困つたことは近氏は元警護隊員であるとは分かれれば逮捕されるので、一方ならぬ心理的に大きな障害だつた。

幸いに二十一年七月引揚げ命令が発表になつたので、苦心慘愴してコロ島から乗船し生きかえつた心地で郷土にたどり着き、感激でただ泣くばかりだつた。昭和二十三年、幸いに新潟県警察官に採用となり定年退官となつた。

長期にわたる勤務ぶりが良かったので、第二の職場として県自動車練習所職員の委嘱をうけて八年間も勤務していた。

(松引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助

## 引揚げ体験記

岐阜県 則竹次郎

志望、そして異郷への旅立ち

小学校に入学したころから支那事変、大東亞戦争と戦いの連続で専ら戦時教育だつた。

高等科二年の卒業式を前にして満蒙開拓青少年義勇軍を志望、昭和十九年三月十五日、岐阜県送出第七次田中中隊（田中鈴夫中隊長）に入隊、田中中隊は河和田分訓練所に入所し、岐阜第四十四中隊を編成し、中隊長以下二百余人が昼夜を分かたぬ基礎訓練に励んだ。翌月に今年度義勇軍入隊者一万余人を対象に入學試験が実施され、幸運にも二百人定員に合格して満蒙開拓青少年義勇軍基幹学校（加藤完治訓練所長兼学校長）に入校した。

この学校の前身は義勇軍準幹部養成所で、昭和十八年度から基幹学校と改名された。